

藝大の在校生・卒業生は、
公募展やコンクールで荣誉ある賞を受賞し、
また各分野の最前線で活躍している。
若き才能がふだんの努力とさらなる意欲を語る。

受賞学生インタビュー
第3回

第4回藝大アートプラザ大賞受賞

山本真衣

◆大学院美術研究科修士課程（工芸専攻 [ガラス造形]）2年

中学生時代からビーズを使ったアクセサリーに凝っていたので、高校卒業後は工芸科に進み、彫金かガラス工芸を本格的に学びたいと思っていました。さらに英語を話せるようになりたいという思いもあって両方が学べるイギリスの大学に留学したんです。

私が留学したウルバーハンプトン大学は、バーミンガム近郊のウルバーハンプトンにある総合大学で、私はそこの芸術学科に入ってガラス造形を3年間学びました。

イギリスと日本の美大とでは教育方針が違って、イギリスでは技術よりもアイデアや表現が重視されます。ですから、日本の美大で学んだ子とはひと味違った色彩感覚と発想力が身についたと思っています。ただし、作品の細部まできちんと処理するとか、高い精度はあま

り求められなかったため、藝大に入るまでの私は、コップを整った形でつくれないほどでした。いろいろなアイデアが湧いてきても、形がきちりと決まらない感じをもともと持っていて、そのきちりとした感覚を得たくて、藝大に進みました。

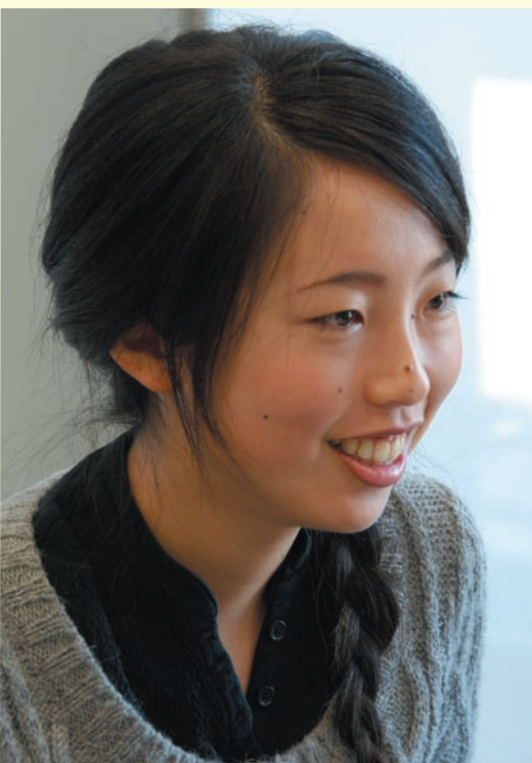
今回、藝大アートプラザ大賞を受賞した作品は「シャボン玉」というタイトルです。藝大アートプラザ大賞展は、2006年から在学生を対象に始まった学内アートコンペで、入選作品を展示、販売するものです。毎回、テーマが決められていて第4回のテーマは「地球」でした。

「地球」と聞いて私がまっさきに思い浮かべたのは、丸い形態であることとエコロジーでした。まずキャンドルホルダーで地球を表現したいと決めているいる考えていたところ、ある日たまたま友

だちと行った代々木公園で、シャボン玉で遊ぶ人たちに出会いました。私たちもシャボン玉を買って同じように遊んでいたら、夕暮れ時、フワフワと浮かんだシャボン玉の球面に、落ちていく夕日と公園の木立のシルエットが映り込む光景を目にしたんです。その美しい映像にインスピレーションを得て、シャボン玉の形をしたキャンドルホルダーを創り、大賞をいただくことができました。

私の場合、作品を創るときに、日常の中からイメージを得ることがほとんどなんです。たとえば大好きな料理をしていて、カボチャの皮のカット面がきれいだなと感じて、作品に活かすこともあります。

ガラス造形を続けていくには、大きな機材や広い場所が必要で大変な部分もあるのですが、自分らしい作品をこれからも創っていきたいと思っています。



第4回藝大アートプラザ大賞作品「シャボン玉 -little World-」(100×100×170) 素材、技法：ガラス、吹き・カット

やまもと・まい
東京生まれ。ウルバーハンプトン大学芸術学科卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科工芸専攻(ガラス造形)に入学。



おいけ・あみ

1988年東京生まれ。東京藝術大学附属音楽高等学校卒業後、東京藝術大学に進学。澤和樹、ジェラルム・ブーレ、オレグ・クリサの各氏に師事。ジャパンアカデミーフィルハーモニック団長。
<http://www.omiii.com/>



「藝祭'09」でジェラルム・ブーレ客員・招聘教授とサラサートの《ツィゴイネルワイゼン》を演奏

第78回日本音楽コンクール第1位・岩谷賞（聴衆賞）受賞

尾池亜美

◆音楽学部器楽科（ヴァイオリン）3年

もともと母がピアノを、叔母がヴァイオリンを弾いていて、二つの選択肢の中から幼な心にヴァイオリンを選んだんです。その後、父の転勤で2年間、スイスのクランという町に住んだのですが、幸運にも同じ町に、ハビブ・カヤレイというヴァイオリンの先生が住んでいらして、すばらしいレッスンを受けることができました。

公立の中学を出たあと、高校は藝大の附属音楽高等学校に進みました。藝高は同級生同士がまるで家族のように仲良しでした。みんなが音楽をするので、大変さがわかりあえる反面、音楽をすることが日常であり、あたり前だと思ってしまうこともありました。でも今は、音楽を演奏することは特別なことだ、ということをお忘れしないで弾き続けたいなと思っています。

クラシック以外の音楽も好きで、藝高時代の邦楽の友達からCDを貸しても

らって以来、椎名林檎の大ファンです。インターネットでメンバーを募って、椎名林檎のコピーバンドを結成し、ヴォーカルを担当していたこともあります。ロックやポップスが好きになってから、クラシックの演奏をするときも、ステージ上での表現や音の幅が広がり、生き方もアクティブになってきました。高校の卒業演奏会では、制服なのに髪をツツツに立てて、ロッカーのような気分でバルトークの協奏曲2番を弾いたんですよ（笑）

今回のコンクールでも、そのバルトークを弾いたのですが、高校の頃とは全然違った心持ちでした。自分らしさを出し、技術点より芸術点で勝負しようと思い、楽しんで聴いてもらえることを優先して演奏したんです。その結果として1位を受賞し、聴衆賞までいただくことができました。正直な自分を皆さんに受け入れてもらえたのですから、本当に感激して

います。

本選で弾いたバルトークの協奏曲2番は、私の最も好きな曲の一つです。ヴァイオリンの華やかな技巧や音色の美しさを聴かせるほかの作曲家の協奏曲と違い、ハンガリーの民謡を活かしたメロディーと打楽器的な奏法が特色で、その表現が自分にとってとてもしっくりくるんです。

大学生活も楽しんでいて、この前の藝祭では、打楽器の友達と組んで、「チンドン屋」のイメージで、浴衣姿でライブをしました。その中で、藝大の客員教授だったフランスのヴァイオリニスト、ジェラルム・ブーレ先生に浴衣を着てもらい、ツィゴイネルワイゼンをマリンバとヴァイオリンの合奏で演奏したことが最高の思い出ですね。そして何より、藝高、藝大の時期に得られた友達は一生涯の宝物です。

ふなびき・しんじゅ

1982年 東京都生まれ。東京大学在学時に自主制作した監督作『山間無宿』(00)が調布映画祭でグランプリを受賞。大学卒業後、東京藝術大学大学院映像研究科に入学(監督領域2期生)し、黒沢清監督、北野武監督らに師事。2008年修了。劇場公開短編作品に『夢十夜・海賊版「第五夜」』(07)、『錨をなげろ』(08)などがあり、オムニバス映画『夕映え少女』(2008年公開)では表題作「夕映え少女」の監督を務め、2009年公開の『携帯彼氏』が商業映画デビュー作となった。最新作短編『テクニカラー』(出演:洞口依子ほか)は、2010年3月に渋谷ユーロスペースで公開される。



監督作品『携帯彼氏』で注目を集める

船曳真珠

◆大学院映像研究科修士課程(映画専攻)修了

もともと映画が大好きで、子どものころにフェデリコ・フェリーニの『道』や黒澤明監督の『七人の侍』に感激したことを覚えています。そして、中学時代には映画に浸っていたと思うようになっていました。

映画を撮り始めたのは、東京大学在学中に入っていた「映画研究会」から。このサークルは一学年10人弱という小さなもので、駒場校舎に通う2回生まででした。仲間たちと映画づくりを楽しんだのですが、もっと外からの目も欲しいと思い大学と並行して「映画美学校」に通うことにしたのです。

東大を卒業したあとも監督の勉強を続けたくて、実践的に学べる藝大の大

学院映像研究科に進むことにしました。映像研究科は、機材やスタジオも充実していましたし、何よりも実際に作品を撮ることができる、夢のような環境でした。

在学中に新港校舎で、北野武先生と北野組のスタッフの方々が実際に撮影するという、信じられないような授業がありました。私もオムニバスの中の一編を撮ることになる「夕映え少女」の脚本を使い、院生は助監督や録音助手を務める機会を与えられたのです。北野先生にはオーラだけでも圧倒されましたが、観察力と記憶力がとくにすごいです。そんなところに気づくのかという細部まで見ていますし、最小単位の

ものを記憶して頭の中で再構成していることに驚きました。また、先生の発言から、数学的に映画を考えられるところも新たな発見でした。

昨年ロードショー公開された『携帯彼氏』は、私の商業映画デビュー作になります。携帯電話の恋愛シミュレーションゲームと女子高校生が戦うという「サスペンス・ラブストーリー」で、携帯に束縛され生活が浸蝕されている時代状況に共感を覚えて、作品づくりに取り組んだものです。

監督としても一映画ファンとしても、日本の男優では森雅之さんや市川雷蔵さんのような、神秘的で影を感じさせる俳優に魅力を感じます。また、最近亡くなられた森繁久弥さんも、体の中に音楽が流れているような色気のある所作がすばらしいですね。

私自身は、『バック・トゥ・ザ・フューチャー』のようなハリウッドの娯楽大作も楽しむタイプで、エンターテインメントとして映画を楽しんでもらいたいという意識があります。娯楽作品と芸術作品の間をめぐらした、観客の方にとってこれまで見たことがないという発見と、純粋な楽しみの両方が兼ね備わった映画を撮りたいと思っています。



監督・脚本・編集作品『テクニカラー』

キャスト：洞口依子、小野ゆり子、岡部尚、吉岡睦雄、マモ山田ほか